

リレーエッセイ 795

続・時間の風景

楽器も指揮もできず音符も読めないが指揮者の小澤征爾先生に憧れており、氏が26歳時に執筆した『ボクの音楽武者修行』という本を繰り返し読んでいます。24歳のときにスクーターを貨物船に積んで渡欧し、努力を惜しまず「世界」を股にかけてマエストロとして活躍していく姿が若々しい文体で描かれている。群馬大学医学部在籍中に初めて読んだと記憶しているが、名前も群馬生まれの私にとって、「世界」は大変遠い存在であった。関係ないが人前で自分の名前・所以を説明できるようになったのも、ごくごく最近のことである。

大学卒業後も群馬大学外科に入局したので、比較的長い浪人時代以外は群馬県から出たことのない私であったが、卒後4年目の平成8年(1996年)、当時「肝移植」で有名な京都大学移植外科で勉強する機会を得た。大学病院で同じように手術研修をしていたつもりであったが、当時の田中紘一教授率いる肝移植チームは、「これが同じ人間か？」と思うくらい高度で

洗練された外科医の集団であった。入局当初、どの血管をどのように吻合しているのか術式すら満足に理解できなかった私は、同僚に手術術式を図解してもらいようやく理解できるようになりました。有様であった。

日常業務も大変厳しく、朝から晩まで患者さんのベッドサイドに付き添い、採血スピッツ作製・咽頭鼻腔培養検査綿棒作製・データシート書き込み・点滴の作製・レントゲン撮影・超音波検査機械の運搬・緊急検査の遠心分離など縦横無尽に活躍し、夜もベッドサイドに丸椅子を3個並べ患者さんの隣で仮眠をとるといった生活であった。現在では基幹大学病院で教授になっている先輩外科医も、我々医員と寝食を共に同様の生活をしていたのを昨日のこのように思い出す。

大変厳しい毎日であったが、常に我々若い医師を夢中にさせる魅力が、確かにそこにはあった。それは患者さん家族との強い関係、同僚医師同士の強いチームワーク、そして何よりも「世界」で戦っているという強い意識であったように思う(実際に戦っていたのは先輩外科医達なので、我々若手医師にとってその「世界」は幻であったと後で

ているような錯覚に陥り、いまだに移植医療に魅了されているのは、厳しい生活で思考能力が停止していたからだけではない。

時代の変遷と共に2005年から日本の肝移植症例数は減少の一途をたどり、昨年の肝移植症例数は隣国韓国の約3分の1程度となっている。臓器移植が必要な肝不全患者数が劇的に減少したとは言えないため、近年

事務スタッフが多い。診療科の垣根も非常に低く、風通しの大変良い病院である。恵まれた環境で臓器移植の症例は年ごとに増加傾向にある。移植医療に理解・興味を持ち接してくれる仲間もようやく増えてきており、日々大変感謝しながら働いている。周囲を夢中にさせるほどの魅力が私にはないと断言できるため、症例数の増加は移植医療が潜在的に持つ「他者への優しさ」によるものだと愚考している。

私が移植医療に携わったのはたった18年前のことである。先人移植外科医が歩んできた挑戦・苦難を思うとき、比較的恵まれた環境で働いている我々中年世代が、先輩方の築いた財産を散財してしまうのではないかと危惧している。

移植医療は、自分で演奏するには難しすぎ、指揮をするには責任が大きすぎ、マエストロになるには偉大な先輩が多すぎ、まだまだ「ボクの移植武者修行」は終わらなさそうである。同時に、かつて先輩外科医に見せていただいた「世界」も全く見えていない。移植医療の未来を語るには、「ボク」はまだ大変未熟で、まだまだ経験不足なのかもしれない。

ボクの移植武者修行

国立成育医療研究センター(東京都)
臓器移植センター長

笠原 群生



知ることになるのだが)。生体肝移植の成人への適応拡大、肝移植適応疾患の拡大、移植後B型肝炎発症メカニズム解明、生体肝移植移植術式の改革、自己肝温存術式の開発、ドミノ生体肝移植の実施、小腸移植への挑戦、多臓器移植への挑戦、血液型不適合移植への挑戦、免疫抑制剤の離脱等、移植医療での挑戦の数々を、在籍した10年間で経験させていただいたことは何よりの財産であると大変感謝している。北関東の田舎生まれで飽きっぽい私が、臓器移植で「世界」と繋がっ

の症例数減少が何を意味するのか、私には明言することができない。

肝移植症例数が減少し始めた2005年に現在勤務している国立成育医療研究センターに赴任した。国立成育医療研究センターは2002年に国立大蔵病院・国立小児病院・研究所が合併してできた、比較的新しい小児・妊婦さんを治療・研究するセンターである。患者さんが小さな子供さん・妊婦さんであることからか、豪放磊落な外科医の世界と異なり、優しい人柄の医師・研究者・医療従事者・